

雨水利用を進める全国市民の会

会長 辰濃 和男

〒131-0032 東京都墨田区東向島 1-8-1

TEL: 03-3611-0573

FAX: 03-3611-0574

H.P.: <http://www.rain-water.org/>



11月上旬!

「市民の会」から・日本中の人びとへ

空と海と大地をつなぐ

『雨の事典』、刊行

「市民の会」の夢であり課題であった『雨の事典』が、11月上旬に出版される見通しです。

ようやく出版されるこの本は、古くから、世界中で行なわれてきた雨水利用の話など、雨のある暮らしのなかで、はぐくまれ、培われた文化を集約しています。地球規模の大気の流れから一匹のミミズの話まで、酸性雨から里山の営みまで、雨と生命のかかわりに目を向け、そこから近年の環境問題をさぐっています。人の心にしみわたり、文芸に表現された雨を見つめています。これほど幅広く、雨を拾い上げ、掘り下げる本は、世界広しといえども見当たらないのではないでしょうか。

制作チームが見て約3年半、100回を超えた編集会議のうち、今年は約50回を重ねました。集中力を要する長時間の会議ばかりでした。合宿も全部で7回、今年はそのうち3回を数えています。会員の声援に支えられた、イラスト担当者や制作チームのメンバーと編集委員の意欲・チームワークで、この本はできあがりました。

出版はひとつの到達点ですが、同時にあらたな目標への出発点です。

できるだけ多くの人びとのお手元にこの本が届きますよう、今後の販売活動にどうかご協力下さい。

『空と海と大地をつなぐ 雨の事典』

レインドロップス編著

北斗出版 発行

定価 2500円+外税

推薦のことばから

■永 六輔さん

生命は海から生まれ、その海を母というなら、雨は祖母です。太陽系宇宙第三惑星を地球にしたのは雨です。

降りすぎてもいけない。

降らなくてもいけない。

雨の優しさ、雨の恐ろしさ。

一粒の雨から大洪水まで、雨の全てを集約した一冊。

僕の献辞は一

「傘は忘れても 雨を忘れるな」

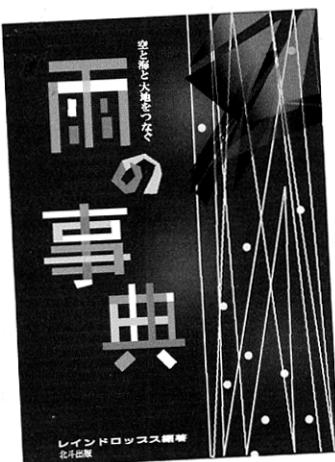
■加藤 登紀子さん

「雨水の有効利用について本を出します」と聞いて、送られてきたのがこの巨大な『雨の事典』でした。

色っぽく文学の香り高く、心そられる雨づくしの物語。かたわらにおいて、心が渴いたらぞいてみることにします。

心のうちに土を持ち、雨のしづくをそこに降らせたら、生命のにおいがたちのぼる。

歳月の足跡を記憶してくれるものが欲しい時代、雨は重要なキャストです。



『空と海と大地をつなぐ

雨の事典』の完成を間近にして

「雨の事典」制作チーム

■ 長尾 愛一郎

埼玉県のある農家では、地下の水みちの経路を熟知していて、それに合わせて野菜の作付けを行なっています。水気を好む野菜は水みちの上に植え、乾燥を好む野菜はそこから離して植えているのです(『雨の建築学』より)。イランの砂漠で地下水路カナートを掘る人びとも、地下水のありかを教えてくれる「井戸植物」を手がかりに、水源を掘り当ててきたといいます。完成間近い『雨の事典』では、このように、空と大地をめぐる雨の道筋を知り、その知恵を暮らしに生かしている人びとを掘り起こすことを柱のひとつにしています。

本書は、終章「拓こう、雨の新世紀」を含め、6章から成っています。

第1章「雨と日本人」では、古代から現代まで、歌や文学や絵画などによって雨をどのように表現してきたかを、第2章「暮らしに生きる雨」では、雨とともに歩んだ風土や歴史、都市のあり方を探ります。第3章「地球をめぐる雨」では、地球規模の大気の流れや雨の源を、第4章「生命はぐくむ雨」では、雨や水なしに生きものが生存できないことを明らかにします。第5章「雨水を活かす」は、市民の会の調査を踏まえて、日本と世界の雨水利用の事例を紹介し、Q&Aのコーナーで締めくくっています。資料編も充実しています。ご期待ください。

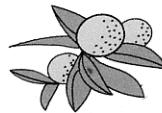
本書は、1997年ころから辰濃会長を中心に構想が話し合われてきました。98年4月に第1回の編集会議を開いてから、4年がかりの作業となります。私たちが執筆にあたって心がけたことは、できるかぎり現場へでかけ、自分の目で確かめたことを文章にすることでした。現地へ足を運ぶことは市民の会のモットーですから、当然のことなのですが。

帯の一節に「雨の万華鏡」と記しましたが、本書の内容は、感性のありよう、文化、暮らし、科学など、さまざまなジャンルに及びます。雨と融和する暮らしを考えるための話題が詰まっています。

市民の会の活動をさらに飛躍させるための素材としても読んでいただければ幸いです。



拓こう 雨水利用の新世紀



8月4日・5日

雨水セミナー IN 高松

盛況のうちに閉会

溜め池とうどんのまち、香川県高松市で開かれた「2001 雨水セミナー IN 高松」へ、市民の会からは16人が参加した。

東京から約1時間、高松空港から会場に着くやいなや、多くの参加者とともに2台のバスに分乗し、市内の雨水利用施設の見学に出発した。

セミナーの開会式は午後1時で、すぐ、高橋裕 東大名誉教授と辰濃和男 市民の会会長の基調報告が1時間ずつ、たっぷり拝聴できた。

その後は、鼎談である。加藤俊作 香川雨水利用を進める会会長の「水環境と雨水利用」、福島忠雄 日本雨水資源化システム学会会長の「小規模分散・環境融和型の自己水源開発」、吉野文雄 香川大学工学部教授の「地球環境と雨水利用」で、最高の話し手による有意義な鼎談だった。

5時近く、文化交流の時間には平安時代から連綿と続いている雨乞いの踊り、滝宮念佛踊りなどに感激した。

2日目、4つの課題のもとに4分科会が開かれた。どの分科会も非常に盛況で熱気にあふれていた。さらに最後の、増田昌三高松市長による「高松宣言」は非常に力強く、印象に残った。

また、8月4・5日の両日、会場ロビーで14の団体個人によるポスターセッションが行なわれた。市民の会からは、「雨の事典」など4件の展示・宣伝を行なった。

セミナーの内容や感想などを市民の会の参加者から寄せてもらった。

*セミナーに参加して 小沢 一昭

、初めて訪れた四国高松は渇水した暑い夏の最中であり、高松市内の街路樹にいる沢山のクマゼミの大合唱に迎えられた。雨の少ない四国香川県で雨水セミナーが行われたことは、水の少ない地域での水利用の知恵をかいま見ることができて非常に有意義であった。

水を大切にする文化(溜め池、用水路、地下水、中水利用)と清い地下水が生み出したおいしい讃岐うどん文化が一体化した風土の魅力を感じた。自然との協和を図った施設がこれからの水の世紀の大きな提言となると思われる。

*市内の施設見学 田中 清子

市内の目抜き通りに設置された400ℓのタンク、香川大学や県庁舎内の大型施設など、数カ所を見学しました。雨水と生活排水を併用して利用するもので、渇水に備えて技術を駆使しており、どの施設も興味深く思われました。

住宅地に囲まれた野田池(7,6ha)は、築造されて300年以上もたつ溜め池である。「水採取技術」の原点として感慨がある。最近、10年もかけて改修工事を施され、水争いの歴史を秘めながら真夏の光の中で静まりかえっていた。

*基調報告について 高橋 朝子

高橋裕先生は、2003年に日本で開かれる「水会議」などへの思いを熱く話された。後半、自宅の雨水利用の話をされると、雨の好きな私たちと同じ土俵にいるんだと、身近に感じた。

辰濃会長はお遍路をされ、最初は雨に会うとおっくうだったが、段々楽しくなってきたという。これから水問題は、自然に「もったいない」と思える感性が重要な鍵であると語られた。地球環境問題は化学式で語られることではなく、人間の心のなかにあるのではないだろうか。

*第2分科会「広げよう 雨水利用のまちづくり」 高原 純子

松山市民の会の桑島さんは、多様な雨水利用のPR活動を展開している。渴水に悩まされた福岡市では、農業用水の合理化、海水淡化など、特徴ある水源開発にも取り組む。京都の上田さんは、琵琶湖は大きな雨水タンクと称し、雨水利用によるCO₂削減に注目していた。

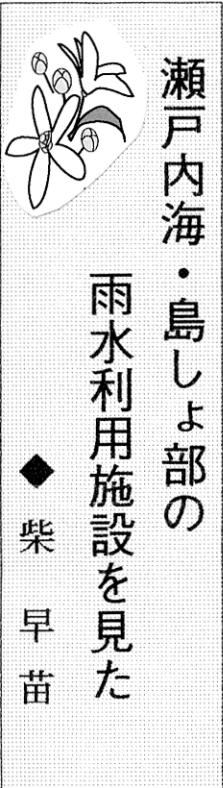
会場の市民から、開発の進行と集中豪雨による洪水対策の必要性が深刻に語られた。雨水を貯え、ゆっくり流す。地下水涵養は都市の水循環の改善に有効な手段だ、という雨水貯留浸透協会の忌部さんの話も心に残りました。

*第3分科会「雨水利用技術のススメ」

人見 達雄

すぐれた発表のなかでも、長崎県高度雨水利用グループの綾部慎二さんの発表はとりわけ印象的でした。

これまでともすれば、雨水利用の運動は、理念運動的傾向が先行していましたが、この発表は、かなり冷徹に貯水容量の決定について、コストとメリット、ハイブリッド化による高付加価値化のプログラム解析を現実的に提起しました。雨水運動を宗教にたとえるならば、現世利益を付加し、市場原理教崇拝者にもうなづける高い段階に入ったことを実感しました。

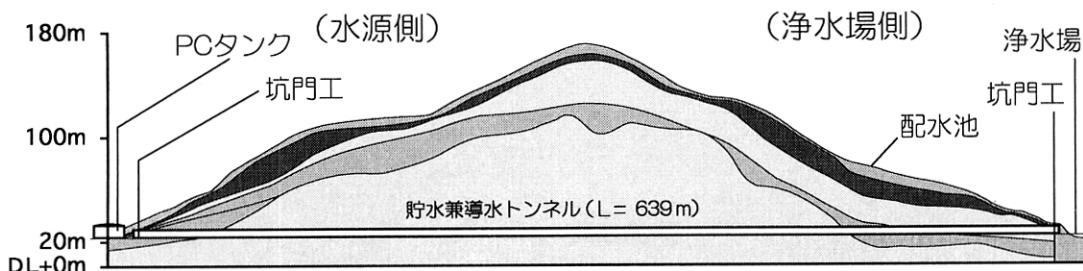


雨水セミナーの翌日、瀬戸内海に浮かぶ大下島と津和地島の雨水利用施設の見学会に、私たち市民の会の有志十数名が参加した。愛媛大学農学部の福島忠雄先生たちが企画されたものである。

大下島は、今治港からフェリーで約40分の小さな離島だ。急峻な山肌に温州みかん畑が広がっている。年間降水量は約1,100mmで、降った雨はすぐ海に流れてしまい、溜めることができない。農業用水は、天水だけが頼りである。そこで、島の中腹部にある既存の鉢巻き状の農道で、上部の土地6.6haに降る雨を受け止め、集水管路を経由して1.5万トンのため池に貯留する。そこから頂上の配水槽（これから建設）に上げ、みかん畑にホースで局所かんがいする計画だ。農薬、窒素やリンの濃度が高く、水は飲料水には使えないらしい。

一方、松山からの便がよい津和地島はみかんと漁業の島である。川から取水した水を地下の貯水兼導水トンネルにためて、島のもう一方の側にある浄水場で処理して、水道水を供給するシステムだ。島を南北につらぬくトンネルは全長639mで、約1万トンの水をためることができる。水産庁の補助をえた事業だが、海水淡化施設の老朽化もあり、生活用水の安定供給が狙いだ。供用開始直前の今、うれしい誤算と担当者は称していたが、湧水が差して、かなりよい水質の水が得られている。たしかに、未処理でも澄明だった。

どちらも予算規模12億円程度。長期的に自然改変のひずみが出るのはどちらだろうと、ふと考えた。



新潟市都市整備局下水道部企画課

タンク・浸透ますなど大幅に増加 新潟市で「助成」の成果

新潟市では、雨水と共に存するという意を込めて、「にいがた水無月プラン」と名づけた雨水流出抑制事業を平成8年度から実施しています（水無月⇒6月：水を田に注ぎ入れる月）。市街化区域内では、昭和62年から平成6年までの10年間で田んぼ224haの内、3分の1に相当する72haを失っており、現在の市内の浸透率は30%にしか過ぎません。その結果、都市型水害、湧水の枯渇、地下水の低下による地盤沈下などの問題を引き起こしています。

平成10年8月には集中豪雨（8.4水害 新潟市内で1万戸が浸水）の被害を受け、平成12年4月から雨水ポンプ場や雨水幹線の整備事業と合わせて、浸透ます、貯留タンク設置などに助成制度をスタートさせました。浸透ますには1基あたり2万円、専用貯留タンクには1~2万円、個人製作のタンクにも1~2千円の助成を行うというものです。

助成前には浸透ます181基、タンク6基であったものが、今年9月14日までの申請件数では浸透ます6,024基、タンク242基と、ものすごい勢いで施設数を伸ばしています。

今年8月の雨水セミナーIN高松の自治体研究会では、墨田区、福岡県、松山市とともに新潟市の助成制度の成果が発表されました。この席で、新潟市の担当者は、「雨水の強制排除から、"共生排助"という考え方で進めている」と話し、浸水被害を防ぐ有効策として主席者の関心を集めました。

（協力 企画課池田係長 文責 宮村）

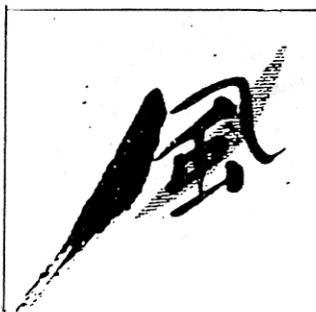
◆視野は人類的に実践は足元から

6月26日、すみだ環境ふれあい館で開かれた市民の会の総会は、今年度の活動課題を満場一致で採択し、一歩を踏み出しました。雨水資料館を充実させ活用すること、「雨の事典」の編集作業の継続、高松の雨水セミナーへの参加、パングラデシュや世界水会議など、国際的視野に立った活動の継続などです。「年報」発行の準備も進んでいます。さらに、下水道料金の不合理に対しても、研究活動を始めることになりました。

◆第10回雨水利用国際会議、 ドイツ・マンハイムで開催

世界の70カ国から500人が参加して、9月10日から14日まで開催されました。会場にはドイツの会社の雨水利用の製品が盛り沢山に展示され、学ぶことだったそうです。安価でだれでも利用できる雨水利用を社会のシステムにして行こう、という動きが広がっています。雨水に関する環境学習の必要や水質を良くして雨水を飲めるものにしていく、などが世界的な目標になってきました。市民の会からは村瀬誠、神谷博、鈴木信宏、今関久和、中臣昌広さんの5人が参加しました。お疲れさまでした。

村瀬さんは帰国後、すぐフィリピンへ。3日間、講演をして20日に帰国し、すぐに24日放送のNHKラジオの収録と、相変わらず多忙をきわめています。



◆都市に自然を！ トンボサミット大盛況

8月4・5日に千葉県市川市で開かれた第12回全国トンボ市民サミットは大きな成果をおさめてあらたな一步を踏み出しました。大人の会場とは別に設けた子どもサミットでは雨水探検隊の子供たちが参加、傘からの雨水集水を発表して好評を得ました。

◆11月18日、井の頭公園でイベント開催 「白子川まつり」

白子川をご存知ですか？ 井の頭公園付近の湧水による貴重な川だそうです。このイベントは「白子川源流・水辺の会」が企画したもので、雨水利用システム展示コーナーもあるようです。午後12時半から3時まで。

◆三島へ、神戸へ、そして

東京・神谷町へ、お疲れさま！

湧水の復活をめざして活発な活動を展開している三島湧水会の10周年を記念する会が9月29日に開催され、徳永暁男さんが参加しました。9月28~29日には神戸市で復興に協力したボランティアへの感謝と交流のイベントがあり、これには山本耕平さんが参加しました。また10月4日に神谷町で開かれるヒューマン・ルネッサンス主催の雨水利用技術などの勉強会には、雨水利用の実践者として、田中清子、磯村光良さんのお2人が参加して話をします。

ふるはは



小高 正治さん
千葉県八潮市立小学校教員

昨年8月の「2000・雨水フェア㏌すみだ」に参加して会員になった新人である。その後、大学の卒業論文作成のために、東向島の事務所に5回もかよい、すっかり事務局の顔なじみになってしまった。

大学では自然地理を専攻し、特に「自然と人間とのかかわり」に興味をひかれ、ゼミの教授の勧めもあって、都市の温暖化と雨水利用について研究することになったそうだ。

現在は新任の教員で、初年度から小学校2年生の担任を任せられている。電話した前日がちょうど運動会で、終わってからの打ち上げで大分遅くなつたそうだ。声に若干の疲れが窺えた。

雨水資料館にも行かれたそうですが、児童の社会科見学はどうですか？ 埼玉

からじゃ遠いですか？ 「東武線で1時間と以外に近いですからね」。ちょっとまだ2年生じゃ早いかな？ 「そうですね。考えてみます」。またまた村瀬さんの仕事が増えそうです。

学校で何か雨水に関して授業で話したり、教材のネタとして利用したりしてますか？ 「いや、まだ特には。地球環境の問題なんかを話したりすることはありますが、具体的な行動までは。とにかく今は自分が学校生活に慣れることが先決なもので」

ほかにも有機農業関連の団体の会員になっているそうで、ぜひとも、早く学校生活にも慣れて、社会人として私たちの活動にも積極的に参加してもらいたいものです。貴重な若手ですから。 (M)

短期集中豪雨と気象情報

◆ 宮村 昌幸

近頃、都市周辺では短期集中豪雨（以前は単に集中豪雨と呼んでいたのだが・・・）の発生が多くなってきている気がする。

つい先日も、群馬県の榛名、渋川近辺で1時間に100mmを超える豪雨が、夜の11時ころに観測されている。専門的な発生原因はここでは置いておくとして、では、このような豪雨に備えるために、どうやって短期の集中豪雨の情報を手に入れるかが問題となってくる。

これまでアメダスなどの気象情報では、1時間前が限度であった。'03年からは30分前の降雨量の情報までが可能となるそうだ。しかしながら、実際のところ、気象庁や民間の降雨情報では、関係機関への発表とメディアに掲載するまでの時間差や、4:00、4:30といった定時情報が多いため、ほしい即時情報はなかなか手に入らない。

その中で私が重宝しているのは、東京電力の雨量・雷情報だ。

(<http://www.thunder.ttcn.ne.jp/>) このホームページは静岡・山梨から新潟・福島の間を6分ごとの更新、2kmの細かいメッシュでカバーしている。携帯のiモードでの接続も可能だ(H8.3～)。このサイトに接続できれば、少なくとも10分前の関東地方の降雨量(mm/時間)、雷情報の入手ができる。しかしながら、ここにも落とし穴がある。接続の渋滞だ。接続者が急増すると一時的に繋がりづらくなる。先の榛名、渋川の豪雨では、夜中のせいか、ほぼリアルタイムでの雨、雷の動きが楽しめた。(当事者の方には失礼します!) これが夕方や別の時間であればこうはいかない。新たな問題の発生である。

編集後記

◆暑い夏でしたがいかがお過ごしましたでしょうか。2001雨水セミナーIN高松のほかにも、日本の各地で多くの自然環境を守る集まりが開催され、暑さの中、多くの方が参加されたことでしょう。

◆空がきれいにならなければきれいな雨は降らないし、土が汚染されては地下水になる雨は泣きます。私たちの運動は、多くの環境保護の運動と最終的な目的を共有しています。今後、各地の雨水に関する動きや、ほかの市民団体の活動について、少しでもお知らせしていければと思います。

◆9月24日夜、NHKラジオで村瀬さんと、ドラエモンの声優大山のぶ代さんを中心とした雨水利用についての番組がありました。そのなかで村瀬さんが、必要なのは「志」ですよ、と言っておられたのが印象的でした。「少年よ、大志を抱け」と言った人がいました。大人もまた大きな志を持って生きることなくして、子供たちに何かを示すことができるでしょうか。

編集長 系賀幸子